

音楽の世界

目次

論壇	人の生き方	助川 敏弥	2
特集	卒業・音楽の世界を歩む人へ		
	心に残る言葉	深沢 亮子	4
	人はひとりでは生きられない	助川 敏弥	8
	特集プロデューサーノート	橘川 琢	11
	生き方を変えた出会い	浦 富美	12
	卒業生とともに歩む音楽	栗栖 麻衣子	16
音楽時評	ショパン映画	助川 敏弥	21
長期連載			
	音・雑記一ひなの里通信一 (36)	狭間 壮	22
	名曲喫茶の片隅から (17)	宮本 英世	24
	音盤奇譚 (22)	板倉 重雄	26
海外通信	ストリートカー・ジャーニー	佐藤ローデン千恵	28
短期連載			
	現代音楽見聞記(1)	西 耕一	30
時評	時の波動：中東革命の広がりと未来	中島 洋一	31
MDJ	会と会員の情報		34

三岸好太郎は、1934年、昭和9年、わずか31歳で夭折した天才的画家である。

この人は私の旧制中学の先輩に当る。旧制札幌第一中学校。現在の札幌南高。晩年の一といってもあまりの早生であるが一連続画「蝶と貝殻」は飛躍と想像力にみちた靈感が見る者の心を打つ。

この人の夫人は画家の三岸節子。こちらも後年高名になった。同業夫妻である。夫人節子は早生した夫と違い、1998年94歳で亡くなるまで旺盛な画業を続けた。

存命中の好太郎の生活は乱脈をきわめた。女性関係、経済観念の欠如、名古屋での急死を知った節子は、これで生きられると思ったと告白している。節子は何度も自殺を考えたと告白している。それでも節子は夫を呪うことはなかった。

節子は、夫の死後も、人に裏切られ、美術界でも、悪意、敵意、中傷、妨害を頻々と受けた。高名になってからも悪意的誹謗を受けた。しかし感心するのは、それでいながら、相手に対し、敵意とか、呪いとか、復讐、怨念とかを一切考えもしなかったし、口外することもなかったことである。ひたすら画業にうちこんだ。このことは、澤地久枝の著書ではじめて詳しく知った。誹謗中傷を受けても愚痴や呪いに走らない。そんなことに心を使うより、本業の絵の仕事に打ち込む方に進んだのであろう。私がやや奇異に思ったのは、それも熟慮の末の選択ではなく、本能的にその道を選んだかのように見えることである。こういう人こそ天性の画家であり、芸術家であるのだろう。

人並みに才に過ぎざるわが友の 深き不平も哀れなるかな

これは石川啄木の歌である。短歌の同人会でこういう場面を見たのだろう。天才である啄木から見れば、人並みの才でしかないのに不平だけ並べる凡人はさぞかし愚かで、しかも哀れな存在に見えたことであろう。

芸術は人に注目されたい仕事であるし、その上で誉められたい仕事でもある。自分を表わすことが本質の仕事だから、これは自然なことなのだが、しかし、そのことが心で主を占めることを放置するようでは、やはりこれもおかしい。芸術は美を扱う仕事でもある。ならば、現実の行動と言動にも美があるべきであろう。一つつしみの美学ー、そういうものを大事にしたいものである。

井上靖の小説にはしばしばこういう人物が登場する。自制心でおのれを押さえる人物。多くは男性である。井上靖がもっとも好んだ男性美の世界であろう。井上靖自身も、ペンクラブの会長選挙で最高位の得票を得ていながら、次点の芹沢光次郎に当選をゆずった。芹沢氏によれば、井上靖はその時電話で「20票30票の差は差とはいえないのですから、あなたがお引き受けください」と語ったそうである。俳優高倉健さんの世界にもこういう自制心と自己抑制の男性美の世界があるように私には見える。Brahmsの音楽にもそれがあのように私には聞こえる。

数年前、NHKの記録番組で知った。太平洋戦争末期、日本のカミカゼがアメリカの戦艦ミズーリに体当たりした。しかし、爆弾は不発で、操縦士は遺体となって甲板に投げ出された。それを見たミズーリの艦長は「この人を明日海軍葬にする」と言った。兵隊たちが、「敵の兵隊をなぜ海軍葬にするのか」と不平を言った。艦長は「この人はもう敵ではない。国に命を捧げた一人の人間だ」と答え命令した。私が感銘を受けたのは、そのことのほかの別のことである。この艦長の子息も海軍軍人でもう高齢だが、今度の取材に対し、父親は生前その話を家族に語ったことが一切なかった、というのである。こんどの取材ではじめて知ったそうだ。「自分は立派なことをした」、と家族にも言わなかった。語れば、それもまた自慢話になる。これも、つつしみの美学である。

(すけがわ・としゃ 本会 代表理事)



心に残る言葉

ピアノ 深沢 亮子



私は今まで諸先生方、両親や家族を始め多くの方々の御協力、御支援、貴重な教えを頂き乍ら長い音楽活動が続けることが出来た。（勿論日々の勉強の積み重ね、幸運もあったと思うが）このことを考えるといつも温かい気持ちになり懐かしさがこみ上げて来ると同時に感謝の思いで心が一杯になる。

この先いつまで弾けるかどうかは分からないが、健康に注意し、より高いものを目指し、又少しでも世の中のお役に立たせて頂ける様、私に与えられた使命を全うしたいと思う。そして音楽のもつ楽しさ、偉大さ、生き生きとした生命力を沢山の方々と共に分かち合えたら幸いである。

両親や知人、親戚等、私の周囲には音楽好きが多く、中には専門的に勉強し、かなりの域に達した人もいた。私の小学校低学年のころ、今から60数年も前の話になるが、戦後の大変な時代で、世の中は殺伐としており、食べる物も着る物も現在とは比べ様もない程不足していた。大人達は戦争で失ったものを取り戻そうとしているかの様に、精神的なもの、心豊かなものを求めて情熱を注いでいた。（そうした環境の中で私は少女時代を過ごしたのだった）。父は音楽が大好きで10才の頃からピアノとフルートを習っていた。当時から立派な先生方がいらしたらしいが、最後は上野の音楽学校時代、姉の同級生の永井進先生に師事した。父は大学で心理学を専攻し、後にそちらの方の仕事に就いたが、音楽の方も熱心に勉強し、私の最初の先生でもあった。永井先生に心酔し、私が小学校二年の時始めて父に連れられて先生のお宅で聴いて頂いた。その時は「まだお父さんで良いでしょう」との事で正式には四年生から生徒としてとって下さった。先生は大変厳しい方で子供だからと甘やかすこともなくレッスン場はピリピリとした空気に充たされていた。田村宏、松浦豊明、大町陽一郎、小林道夫等の諸氏他数人の大先輩の方々も生徒でいらした。

中学三年の時先生のお勧めにより日本音楽コンクールを受けた（当時は毎日音楽コンクール）。六年生で学生音楽コンクール小学校の部で全国一位を頂いたが、学生コンクールとはレベルが段違いで課題曲も大層多く、夏休みには七、八時間位猛

練習をし、電車で三時間もかかる東金から目白の先生のお宅へレッスンに通った。本選は十月に日比谷公会堂で行われ、小林仁さん、大月フジ子さん（今のフジ子・ヘミングさん）等と御一緒だった。その二日前に右手小指がひょうそうになり順天堂で手術を受けた。余りにも痛みがひどく、前日先生の所へ「棄権させて頂きたい」とお願いに上がったが、先生は鬼の様な顔をされ、大声で「死んでもやれ！」とどなられた。この一声で私はなんとしても弾こうという気になり、当日は痛みを忘れ無我夢中で演奏した。結果は思いがけず最高位だった。後日両親と先生のお宅へ御挨拶に伺ったが、先生はニコニコ顔で「亮子ちゃんは一次、二次とも最高点だったのだよ。出場を止めることになれば入賞するチャンスを逃したかも知れないし、又、甘えの気持ちが生まれただろう」とおっしゃった。永井先生は厳しいがまっすぐな方で、生徒が音楽的に素晴らしく弾けた時は御自分の事のように喜んで下さった。子供の私ではあったが、なぜ先生があの時どなられたか、又先生のお気持ちが少しずつ分かってきた。先生は私のことを本当に考えて叱って下さったのだと両親も云い、私もそれを感じたのでとても有難いことだと思った。



永井進氏。 留学直前に頂いた写真。(1956年)
写真表面に、氏の筆による「大成を祈ります」の言葉。

後にウィーンへ留学したが、その間にN.Ö. トーンキュンストラ管弦楽団、ウィーン室内管弦楽団、グラーツ・フィルハーモニー管弦楽団等から定期演奏会のソリストとして起用された。中でもN.Ö. トーンキュンストラ管弦楽団からは五年続けて招かれた。この定期公演はいつも四日間連続で催され、二晩は楽友協会の黄金の間で、あとの二夜は近郊の都市で行われた。私がモーツァルトのコンチェルト d-moll K. 466 を弾くことになっていた時だった。その数日前に突然 40℃ の熱を出し中々良くならなかつたので入院した。事務局長に代わりの方をとお願いしたが、見つからず、やはり自分が演奏することになった。体調不良、しかも思う様に練習も出来ないままステージに上がるのは内心不安だった。でも私は割に健康に恵まれ、いつも自分を信ずる気持ちがあり（これも両親が常に私を信頼して育ててくれたお陰だと思ふのだが）いざという時に力が湧いて来る。



ウィーン楽友協会大ホール・黄金の間にて。チャイコフスキー ピアノ協奏曲を演奏(1961年)

その時もそうだったが、きっと神様が助けて下さったのだろう。(その折の指揮者はロベルト・ヘーガー氏で、具合が悪かった私を心配されてコンサート前の打ち合わせにわざわざ私の下宿まで来て下さった。) 本番では何とか無事に演奏が出来てホッとした。しかし初日ステージを歩く際は体に力が入らず、フワフワと雲の上を歩いている感じがしたものだ。この時も永井先生のことを思い出した。楽屋には入院中お世話になった Dr. アントン・ノイマイヤー教授が注射針をもって控えて下さったのも大変有難かった。この方はピアノがとてもお上手で、ザルツブルグのモーツァルテウムを御卒業、ウィーンフィルの方々を招き、学会の開会式等でシューマンやシューベルトの「鱒」などのピアノ・クインテットをよく演奏された。著書も色々出しておられるが、その中で「現代医学のみた大作曲家の生涯 ハイドン、モーツァルト」は有名で、磯山雅、大内典両氏の訳で東京書籍株式会社から出版されている。

当時はメールもなく、電話すら何時間も待っての末につながる、という時代だったので毎週一、二度は実家へ手紙を書き、両親を始め多くの方々からも頂き、いつも待ち焦がれる思いで読んだのだった。両親からの手紙には度々「素直、いつもお世話になった沢山の方々への感謝の気持ちを忘れずに」—素直というのは唯、人の云うことにいつも同意するのではなく、自分の考えもきちんと持った上で— とい

う風にも記されてあった。

まだ私が幼い頃、「この子には才能があるから本格的にやらせなさい」と両親に話した、というパリに長く住んだ銀行員の感性豊かな伯父がいた。この伯父からの便りには必ず「謙虚であること」という言葉が書かれていた。この伯父の影響もあったが、私は子供の頃からいつかヨーロッパへ留学し、そこで勉強することの夢を持っていた。幸い当時かなり難しかった留學生試験に合格し、高校二年の終わりに親元を離れウィーンへ旅立った。両親や伯父達は心配もあっただろうと思う。私に人間として大切なことを度々手紙に書き、日常の懐かしい文面の中に愛情を持って教え、励ましてくれたのだった。

ウィーンでは心温かい素晴らしい友人達に恵まれ、—その友人達とは今も尚変わらず親しいおつき合いが続き、音楽仲間とは一緒に国の内外でコンサートをしたり、CD 録音を行う等、いずれも音楽が取り持つご縁となっている— 又勉強にいそしんだが、元来好奇心旺盛な私は音楽のみならず絵画、彫刻、建築等さまざまなことに興味を持ち感動し、楽しい充実した留學生活を送ることが出来た。ヨーロッパ文化の偉大さに圧倒されつつ、又自国の優れた文化に改めて心を動かされたものだ。

何事も一つのことを続けて行くには大きなエネルギーと気力、強い意志、仕事への愛情、健康管理等が大切だと思うし、実を結ぶまでの—それも終わりのないことだが— 膨大な時間が必要である。音楽は多くの人々と直接心を通わすことが出来、慰めや気持ちを鼓舞する力を持つ。この素晴らしい対象を簡単に手放すことなく一生をかけて努力を惜しまず、やり遂げることの大切さを私の生徒にも折にふれて話すようにしている。これから新たな人生の第一歩を踏み出される若い方々もどうか夢と希望を持って歩んでゆかれるよう祈念している。

(ふかさわ・りょうこ 本会 代表理事)



(上) リサイタルのポスター(1966年)

(下) Wienの友人たちと



人はひとりでは生きられない

作曲 助川敏弥



三月の卒業期にのぞんでの主題であろうが、自分の経験談を書きたくとも、その前置きとして、音楽に進む場合の一般的前提を書いておかないと話を始められない。

音楽専攻の場合は一般職業と違い、卒業して会社に入って社会に出るというコースをとるわけではない。はじめに音楽を専攻するに至る場合の類型を整理してみよう。

音楽にかかわる始まり

1. 幼児教育による開始。ピアノ、弦などの演奏実技の分野はこの部類。四歳くらいから始める。演奏実技はこの年齢で開始しないと専門家にはなれない。
2. 中学くらいから本人の意志により始める場合。この年齢からでは1の演奏実技の分野はすでに遅いが、作曲、指揮では可能である。
3. 一般大学入学後、音楽に目覚め、ころころぎす場合。開始が遅いので以後かなりの困難をともなう。演奏実技は大変厳しい。
4. 1. 2. により音楽の勉強を始めていながら、事情により一般大学に進む場合。この場合、音楽専攻の仕事を始めながら一般職業と並立している人もいる。追加すれば、この類目には、家庭が保守的で、社会通念上、男子が音楽に進ことを許さず、経済的にも余裕がありながら一般大学卒業後、音楽専攻に移行する人がある。主に戦前の、旧家、名門、資産家の息子であった。いまは社会通念が変りこの種の人はいないかごく珍しい。

このように、一般職業の通念とは異なる進路をとるので、一括して人生心得的なことは書きにくい。人生は偶然と必然がからまり相互に作用しあい織りなしていく。しかし、よく考えれば、偶然と思われたものも実は根拠あったものであることもある。ここでは、音楽専攻者が知っておいた方がいいことを書く。演奏と作曲に限り、評論は文学に属するものとしていまは対象としない。

第一の関門、信頼できる情報を得ること

この雑誌の発行団体の会員はすでに職業として音楽の分野に入っている人が大部分である。従ってこの文は、これら大部分の会員とは別に、これから専門分野に入ろうとしている人たちに向けたものということになる。

何にせよ、正確な情報を得ることは、人生と世の中、あらゆる場合の必要大前提であることは誰でも承知である。しかし、ここでまず運不運が分れる。なにぶん音楽は特殊な分野である。正確な知識を持つ人が周囲にいるとは限らない。一般職業であれば、A社B社は日本有数の企業であり、いい大学を出てそこに入社することが望ましいことは誰でも承知している。しかし、音楽の分野では、そもそもどういうコースがあり、その中のどれを選ぶことが望ましいか知る人が少ない。ここが第一の関門である。音楽を志そうとした時に、正確な情報を与えてくれる人が身近にいるか、いないか、これでまずその人の人生が決まるといってよい。まことに人生は出会いの結果であり、これを書きながらも詠嘆を覚える。そもそも当人の才能がどれだけのものか、それを判定しその結果を遠慮なく教えてくれる人がいるか。そして趣味ではないのだから、専門に進む場合、職業的にどの程度の水準まで到達できそうか。専門界の構造まで知っておかなければならない。そしてこれには経済的的局面も含まれる。



NHK時代の自筆楽譜・放送台本
(1960-70年 30~40歳の頃)

実力本位とはいふけれど



1987年バイオシビック環境音楽研究所を立ち上げる。

写真は足利SAの道路公団ショールームの音楽をつくるため
現地視察をした建設現場。(1991年 61歳)

よく、実力本位ということが言われる。しかしこれも実際には余り意味がない。無論実力は必要である。それなのになぜ余り意味がないか。同等の実力の人が多いからである。ある水準まで達した人はだいたい実力は同等である。だから、実力プラス実力以外の要因が決め手になる。いかにいい人脈にめぐまれていても人柄がよく

なければだめである。礼儀知らず、生意気、他人との協調性の欠如、友情親切心の

欠如、金銭に露骨で無遠慮な損得勘定、こういう人はまずだめである。人との交際で、損になるか得になるかを露骨に計算する、会合に出ることも、利益余りなしと判断した場合出てこない。こういう人は、本人は利口に立ち回っているつもりであろうが、実は自分が他人から採点されていることに気がついていない。いかに有利な先輩に恵まれた系列に属していても、生意気で、礼儀知らず、恩知らずの後輩をとりたてる先輩はいない。

人は一人では生きられない

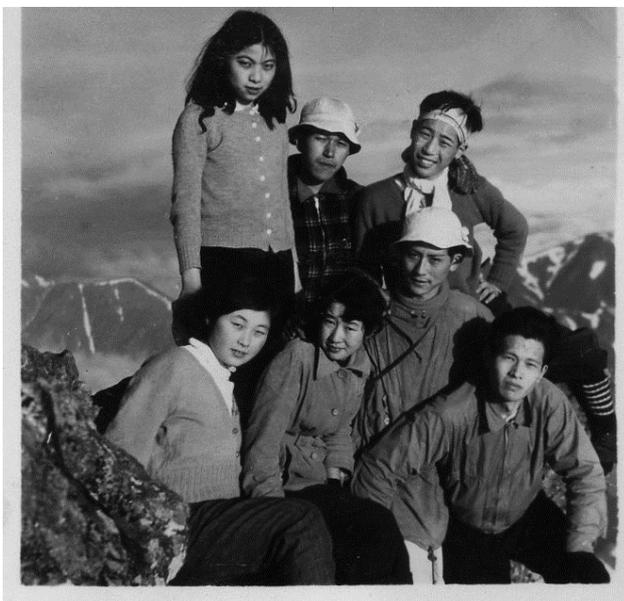
人は、いつ誰の世話になるか分らない、他人の力を借りなければ生きられないし、まして社会の中に自力で進出できるものではない。

人生は出会いで決まると書いたが、実はこの段階ですでに本人の不徳から失敗することがある。当人は失敗に気がつかない。貴重な人材に出会っているのに、そのことに気がつかない。これは人を見る目がないうより、当人の徳義に属することであろう。相手を利用するという低劣なことではない。他人の力がなければ生きられないという謙虚心があれば相手への尊重心も生まれる。

社会主義が失敗して消滅し資本主義だけの世界になった。資本主義はあらゆるものを商品化する。商品であるからコストはなるべく安上りがいい。音楽もコンクールで即席栽培。競争社会である。音楽家の方も、早期教育の激化と相まって、競争意識が激しくなる。友人は競争相手、ライバルになる。友情より、出し抜き相手としての競合意識の方が先行する。こんな馬鹿げたスパイラルにはまらないこと。

私たちの青春時代はまだ世の中に余裕があったのだろうか。友人のために徹夜で協力した。彼等の数人はすでに故人になったが、彼等のおかげでいまの私がある。その代り迷惑も互いにかけて放題だった。「それが青春だ」と岩城宏之がどこかで書いていた。

(すけがわ・としや 本会 代表理事)



(1952年 22歳)後列左から岡本正美(後の山本直純夫人)・助川敏弥・山本直純/前列右より 篠原眞・村方千之

3月、卒業シーズンを迎えます。「音楽に生きる！」と新鮮な心で大海に漕ぎ出す意気はあれども、残念ながら世は音楽・芸術関連の事業や予算縮小や廃止など、向かい風の強い状態です。さらに卒業後の継続は、現場での大きな課題です。今現在はどうにか続けていても経済状況やライフスタイル、人生のライフステージの変化に伴い様々な問題や困難に直面し、「自分もいつまで続けられるか。耐えられるか。」と心細さに苦しむ孤独な声を聞きます。一方で、同じようにこの荒波を渡っているかつての学友の姿に奮起したり、大先輩である師匠から教わった言葉や経験談が励みとなり、苦しい今の支えになっていると教えて下さる人も少なくありません。

それならば、暗い情勢をただ嘆くのではなく、卒業というスタートの季節に、音楽家自ら希望を灯したい。卒業の先、向かい風に耐え一歩を踏み出し、さらに継続するための。それも、学校を卒業してこれから音楽に深く関わる生き方を歩み始める人へ、さらに現場で初心を思い出し踏みとどまっている人に向けて……。このような気持ちから、縦のつながり・師弟、横のつながり・友情について、世代や専門が違う4人の音楽家から想いをお寄せいただきました。人格形成の段階、まだ何者でもなかった自分のかたちや生涯の芯を創ってくれた師匠の教えと言葉、そして感謝の思い。卒業しても継続する楽友とのあたたかな交流。学び舎から今の自分へ、支え、支えられる音楽家同士の関係。頂いたのはいずれも、実体験から生まれた熱ある言葉でした。

さらに卒業・学友・現実の運営や継続の視点から、地域と学友の密なつながりを25年代々引き継ぎ、意気高く活動する「つぼみの会」のメンバーによる座談会もご寄稿頂きました。今年1月、私自身聴きに行き感銘を受けた「ぴあの×ぴあの」のコンサート（後援：日本音楽舞踊会議ほか）のご縁です。

音楽家とは「職業」でもあり、同時に「生き方」でもあります。音楽を志し、日々研鑽と実践を通じて求道続ける者同士。同じ一つの楽譜からそれぞれ自分の解釈を経て音楽を創るように、実際に困難を乗り越えてきた先輩や仲間の言葉の中から、現場で共に支え合う音楽人の姿から、自分の「生き方」のヒントとなる何かを感じ取って頂ければ幸いです。

（きつかわ・みがく 本誌副編集長）

生き方を変えた出会い

恩師 上浪明子・そして島筒英夫両氏とともに

声楽 浦 富美



「卒業……師弟・学友への思い～これから音楽の世界を歩む人へ～」という内容で記事を書いて欲しいと依頼されましたが、私にその資格があるだろうかと正直悩んでいます。世の中には素晴らしい才能をお持ちで、華々しく活躍されている方が沢山

いらっしゃるのに、私のように地域密着で音楽活動をしている者に、これから大きく羽ばたいていく若い音楽家達に何か参考になることをアドバイス出来るのか・・・今までの自分自身の音楽との関わりを改めて思い返しています。

高校1年生の時、ただ「歌が好き」というだけで声楽の勉強を始めました。高校3年生の夏から武蔵野音楽大学受験のために数回高知市から上京、同大学に進学した先輩が師事していた上浪明子先生のレッスンを受ける事になりました。この時が生涯の師となる上浪先生との初めての出会いでした。1968年(昭和43)武蔵野音楽大学に入学、2002年(平成14)8月6日に先生が亡くなるまで、歌だけでなく本当に数

え切れないほど大切なことを教えていただきました。先生から教えていただいたこと全てが、今の私にとって貴重な宝物となっているような気がします。

音楽現代

2011年3月号 定価 840円

- ♪特集1 生誕200年記念 フランツ・リスト
～鋼鉄の作曲家の横顔と音楽
- ♪特集2 日本のオーケストラを振った
外国人指揮者ベスト〇人
- ♪巻頭カラーページ・特別取材！
小澤征爾&下野竜也&サイトウ・キネン・オーケ
ストラ in ニューヨーク
- ♪カラー口絵
 - ・読売日本交響楽団第500回記念定期演奏会
 - ・ワーグナー音楽祭あらかわパイロイト特別公
「ヘンゼルとグレーテル」
 - ・新国立劇場「トリスタンとイゾルデ」
 - ・ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
ジルヴェスター・コンサート
- ♪インタビュー
田中信昭 一柳慧 粟國淳 松原勝也
福田祥子 大村博美 山瀬理桜 齊藤一郎

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL3861-2159

上浪先生をご存知の方は、その厳しいレッスン風景を思い出されることと思います。日本音楽コンクール声楽部門に1位入賞された方など、数多くの優秀な生徒さんを育て上げ、現在も多くの方が第一線でソロ活動をされたり、大学などで後進の指導にあたるなど幅広く活躍されています。

私は「真面目だけが取得」といった情けない生徒でしたが、「真面目さだけ」で可愛がっていただいたのかもしれませんが。卒業後は先生の秘書的なお仕事のお手伝いもするようになりました。その時のお手伝いが今とても役立っています。人間としての生き方を、先生の後姿から学びました。先生が常々言われていたことに「どんな仕事でも10年は絶対続けること」「演奏会などで人様にお願いをする時より、終わった後の方がとても大事。きちんと感謝の心を持って礼を尽くさなければいけない」等など。コンサートの後、一人ひとりにお礼の葉書を書かれていた先生の姿が思い出されます。

「どんな仕事でも10年は続ける」という先生の言葉に背いて、卒業後たった2年間で高校の非常勤講師を結婚の為辞め、その後主人の海外単身赴任の間、二人の子どもを一人で育てなければならない、と言う事を言い訳にして、長い間先生の下から離れてしまうことになりました。

下の子どもが幼稚園に入園した頃より音楽活動を再開しましたが、ソロ活動をずる訳でなく、幼稚園のお母さんコーラスの指導や、自宅で子供たちにピアノを教えるなど、母親業を最優先、下の子どもが小学校2年生の時から、地元千葉県我孫子市の生涯学習の一環である「我孫子市長寿大学」のコーラス指導を始め、現在まで27年間続けています。

長いブランクを経て、高い敷居を越えて上浪先生の下に再び通い始めたのが、先生が亡くなる4年ほど前の1998年頃です。これにはある作曲家との出会いがあるのですが（それは又後でお話することにして）、上浪先生は長く離れていた私をごく自然に受け入れて下さいました。亡くなるまでの約4年間、長いブランクを取り戻すかのように頻りにレッスンして頂きました。そして先生が亡くなる一ヶ月前までみていただきました。



上浪明子氏

先生は膵臓がんに侵されていましたが、知っていたのは

ご家族だけで外部には一切公表されませんでした。先生ご自身も勿論ご存知だったようです。めっきり痩せてこられる様子を目の当たりにして「きっと重大な病気に違いない、もしかするとお別れが近いかもしれない」と直感しましたが、先生は一度も休むことなくレッスンをして下さいました。2002年7月中旬に受けたレッスンの帰り際、「8月は夏休みをとるので、9月にまたいらっしゃい。良い夏休みをね・・・」とお別れしたのが先生と会った最後でした。最後のレッスンの時、先生が使われていた、まだ新しいCD/MD ラジカセを頂戴しました。いま思うと先生からの形見分けだったのかもしれませんが。

上浪先生からは数え切れないほどの目に見えない大切なものを頂戴しましたが、何よりも見事に一生を生き、人生を全うされた、亡くなるまで歌を歌い続けられた、そのお姿こそが、今も私の心に強く焼きついて私の心の支えになっています。先生から頂いたご恩に報いるには「これからもずっと歌い続けていくこと」だと思います。

ずっと長いブランクの後、「もっといい歌が歌えるようになりたい、少しでも心に響く歌が歌いたい」と、歌の勉強を再開するきっかけを作ったのが全盲の作曲家、島筒英夫さんの曲との出会いでした。1995年頃、一冊の手書きの歌曲集が私の手元に届きました。それを手にとって口ずさんでみましたが、今までに感じたことのない優しく温かい曲で、私の心の中にずっと入りこんで来ました。それ以来ずっと歌い続けています。島筒さんにお会いしたのはそれから暫く後でした。2歳の時ご病気で失明され、武蔵野音楽大学ピアノ科に当時全盲として初めて入学、卒業後作曲も始められた方でした。最近卒園時に広く歌われている「さよなら ぼくたちのほいくえん(ようちえん)」の作曲家でもいらっしゃいます。作品の素晴らしさは勿論、お人柄も素晴らしく、明るく前向きに生きていらっしゃる姿に強く心惹かれました。



島筒英夫氏

島筒さんの曲を広く知っていただきたい、それなら自分でコンサートを企画しよう・・・と1998年10月に我孫子市で「あびこファミリーコンサート」をスタートさせました。コンサートの企画、主催など全く初めてのことばかりでしたが、沢山

卒業生とともに歩む音楽

～地域が育む音楽活動 つぼみの会の25年～

ピアノ 栗栖麻衣子



夢と期待を胸に音楽大学で学ぶ学生たち。しかし卒業後の生活や音楽活動を考えると、学校や仲間と離れ、本当にやっていけるのだろうか、と孤独と不安に包まれるに違いない。そんななか、地域との関わりを持ちながら、クラシック音楽の演奏や指導に携わる学生から社会人までが一緒になって音楽活動を続けている団体がある。埼玉北部の熊谷市を拠点に活動する「つぼみの会」。埼玉県立熊谷女子高校の卒業生によって構成されているこの会の25年に渡る活動を、会員の座談会の形で紹介し、団体で音楽会を企画し実行すること、音楽による地域との連携、そして日々の生活の中で音楽を続けてゆく思いをお伝えしたいと思います。

座談会年月日：2011年1月30日／ 場所：熊谷市立中央公民館

座談会参加者：小川明子（声楽家）、沖野谷浩美（オルガニスト）、石井清実（小学校教諭）、川田亜希子（声楽家）、香取あさ（ピアニスト）、長田香保里（高校音楽科教諭）、新井陽子（音楽療法・教育）、栗栖麻衣子（ピアニスト）

【「つぼみの会」創立のきっかけ】

小川：高校の文化祭企画「若い種のコンサート」が母体となっています。私が大学2年のとき中学の恩師から演奏会をなささいよとお話があり、同級生や後輩を誘って一晩コンサートを開催しました。そのときはまだ会になるとは想像していなかったけど、出演者と話しているうちに、どうも音楽学校にいてもなかなか人前で演奏するチャンスはなさそうだ、それなら一回でも増やそうではないか、学生なら春休みは時間があるからと、毎年演奏会を開くことにしました。翌年（1988年）から「つぼみの会」と名前をつけ、毎年新卒業生を迎え、コンサートを開催してきました。

沖野谷：受験生のための勉強会も、コンセプトは同じですね。真剣に勉強したものを発表し、同時に人の演奏を聴きながらさらに勉強する。

長田：受験生勉強会はありがたかったです。受験生同士で頑張ろうねという意識をもてたり、いろいろな学校の傾向の情報をもらえたり。

小川：それぞれの専門を活かして生徒のレッスンを頼める互助会のようなものでしょうか。

川田：ドイツ歌曲をはじめとした勉強会の開催も楽しいですね。下の学年の人たちからも意見がどんどん飛び交い、ディスカッションしながら勉強するのは有意義。

栗栖：これまで会の運営のなかで危機のようなものはありましたか？

長田：会員と連絡がとれなくなることは何度か。最近では会報や連絡はメールで行っていますがアドレス変更の際など連絡がつかず、レスポンスもなかったりしてそのまま疎遠になってしまったり。

香取：だんだん出演者が固定してマンネリ化することもある。

小川：それはそれで、そのとき出られる人に出てもらえればいいんじゃないかな。

【仕事、子育て、そして演奏活動】

栗栖：石井さんはずっと続けていらっしゃるでしょう。仕事と子育てをしながらの活動はいかがですか？

石井：大学在学中は試験重視、卒業すると就職でしょう。教員になってアップアップで演奏はやめてしまおうかと思った時期がありました。女性は就職、結婚、子育て、と次々にあって、演奏しなくなる理由はいくらでもつけられますから…。子育てが落ち着き仕事にも復帰して、ふと気が付くと何も歌えなくなって・・・もう一度やってみようと思いました。子供にも一生懸命やっている姿をみせたいと思い、数年前から復帰しています。



栗栖：お子さんがいっしょにコンサート会場に来て聴いているって素敵なことですね。

小川：長く続けることの大切さは、子供はみてよくわかると思います。仕事もあって大変そうだけど、お母さんには仕事やママ友の他にもこういうコミュニティがある、というのよ影響ではないかと思います。

栗栖：後輩にとっても、音楽を続けるなかにもさまざまな選択肢があり、教員をしながらこんなに良い演奏される先輩がいるなどいろんな先輩方の姿を身近にみることでまた励まされるものですよ。

【地域との繋がり】

栗栖：毎回のように私たちのコンサートを聴きにきてくださる方も多く、本当にありがたいことです。昨年と一昨年にさくらめいと（熊谷文化創造館 1000 人収容ホール）で開催した 2 台ピアノコンサート「ぴあの×ぴあの」はお陰様で各回 700 名近くのお客様にいらしていただきました。これは地域との繋がりがあってのことと思いますが、いかがでしょうか。

小川：会員一人一人が普段演奏活動やレッスンをしていく中でそれぞれのコミュニティを大切にしている、その総合力の結果ではないでしょうか。個人の蓄積が団体の蓄積になっているところは大きいと思います。文化活動をしている者同士の連帯感は強いですね。

長田：とくに音楽界は一度繋がるとそのコミュニティや師弟関係は絆が強くと、長く続きますね。

沖野谷：知り合いを頼ってというのは何より大きいですね。

香取：コンサート宣伝活動として、各団体へ出向いてのデモンストレーションは好評ですし、宣伝効果も高いですね。

小川：もしその演奏会に来られなくても、こういう演奏をして活動している人がいるんだ、と知っていただくだけでもありがたい。とにかく動かないとなにも伝わらないです。また、やはり地元（熊谷市～埼玉県北部）を中心に活動している人が多いのは強みだと思う。

栗栖：都内から少し離れているという熊谷の立地も関係するのでしょうか。音楽は好きだけど都内へ出かけて聴くのは大変という人は多いです。

ところで今度の夏の親子コンサートは、また新しい層のお客様を開拓しようというところもありますね。

川田：私たちの世代は「誘ってくれてありがとう、でも子供が・・・」という方が多い。

新井：親子コンサートは、私も音楽療法の経験を活かしてぜひやってみたいと思っ



「ぴあの×ぴあの」コンサート(2011年1月19日)の紹介
(毎日新聞(2010年12月3日付))

ていた企画です。

小川：私たちのコンサートのお客様は比較的年齢層が高いので将来的にみるとちょっと苦しい、50周年の時には今のお客様は来られないだろうし・・・そのときのために今から聴衆を育てるという気持ちで、世代を超えて親しんでもらう活動範囲を広げていきたいですね。

栗栖：聴く人ありきですものね。

長田：音楽人口は年々少しずつ減っていますね。音楽高校入試は定員割れのところもあります。音楽をやっていこうという若者がこれからもいてくれるといいんですけど。

新井：そうですね。私たちの学年は5人が会員として活動していますが横の結びつきが強く、同年代から受ける刺激や励ましは大切だと感じています。今年も5人の自主演奏会第2回を計画しています。

栗栖：会がうまくいくもうひとつの秘訣は、会員の多くが運営全体を把握し、誰が実行委員になっても成り立つことでしょうか。またメンバーが家族のように集まり大変な事務作業でさえ楽しんで取り組めてしまうこともあるかと思います。

【長く音楽の世界で生きていくために必要と思うこと】

沖野谷：なんといっても周りの理解でしょうね。傍からみると遊んでいるようにしか見えなかったりするときもありますから・・・。

石井：とくに子育てとかしていると大変。それに教員をしながら音楽活動も続けている人は少なくとも私のまわりにはいないですね。

香取：練習する場所、環境。家族の理解。

小川：私は声楽だから思うけれど、声楽は最近のピアノのように消音機能が付けられないですし（笑）、練習場所と時間は気を使いますよね。

栗栖：どんなに研究し練習に励んでも、聴いて下さる方々とのコミュニケーションがなければと思いますが、その点で工夫してきたことは？

沖野谷：ご来場くださった方へのお礼・ご案内は当然ながら欠かさず。またお客様・アンケートのご意見ご感想を大切にし、企画に反映したり、近年では、あまり演奏される機会のない合唱作品を取り上げたりと、一方通行の勉強会に終わらせないよういつも皆で話し合ってきました。

栗栖：新卒業生や学生が主に出演する演奏会として別枠で入場無料の夏のコンサートを設けていますね。若い人たちを紹介したり、また会員同士もコミュニケーション

ンをとれる機会でもあり、お互い尊敬し合い励まし合う存在があるのも重要かと。

【向かい風のなかで音楽を志す若い方へのメッセージ】

小川：自分のペースで、たとえゆるやかでも続けていって欲しい。コンサートには、できるときにできる人が参加できればいいと思います。たとえ会から離れていったとしてもそれぞれが社会と関わりながら音楽活動をしていってくださればいいし、またいつか会に帰ってきてくれてもいい。みなさんの活動の支えになればと。また親子コンサート企画のように地域に



卒業生、そして地域とともに 25 年

還元できるような社会的な活動はしていきたい。会が始まって 25 年、人間だったらもう立派な大人ですからね。音楽人としていかに世の中の役に立てるか一人一人が考え、会のあり方を模索していけたらと思います。

【座談会を終えて】

音楽と共に生きるうえで大切なことについて、私自身改めて考える機会になりました。自らの在り方や活動の意義、個性やスタイル、自他との関係性を、腰を据えて見出していこう、続けていこうという覚悟と情熱。そして素晴らしい手本でいてくださる師匠、アドバイスをくださる先輩と一緒に活動する仲間、応援し支えてくれる存在が傍にいることはとても大きいと確信します。さらには演奏会に関わる人や仕事の全体（音楽～作曲者～演奏者～マネジメント～舞台～聴衆・・・を取り囲む全体像）がみえていることやその連関のどこにいるのかを知ることは長く続けていくうえで重要なことと考えております。

（くりす・まいこ 本会 事務局次長）

つぼみの会ホームページ <http://www.green.dti.ne.jp/tsubomi/index.html>

前号二月号に、ショパンの「別れの曲」について、[雪の華]さんが書いておられた。ショパン映画について、若干補筆したいことがある。

ショパンの伝記映画は三つある。

新しい順から逆にいうと、アメリカ映画、フランス映画、ドイツ映画、である。最後のアメリカ映画は 1944 年版で、これはひどいものだった。ショパン役が、コンラッド・ファイト、という人、この人は、豪傑剣豪型の人でショパンのイメージからは縁遠い。嵐寛寿郎がショパンを演じているようなものだった。助演の教授役がポール・ムニ、この人は渋い名優だが、このときは悪ふざけでまったく駄目だった。演奏旅行の先は目茶苦茶で、新聞の映画評で、ニューヨークと東京が省かれた、と茶化された。

これは問題外として、ドイツ映画は劇場公開されなかったと思う。NHKの TV が放映した。私は見たが、ショパンがドイツ語を話すことがまず興ざめで感心できなかった。三つ目がフランス映画、これは名画である。これはドイツ映画とは違う別物である。主演が、ジャン・セルベという人。いかにも虚弱体質で繊細な感じ、ショパンその人が出ているようだった。この題が、原題、「La Chansons d'Adieu」別れの曲、だったと思う。この映画のすぐれた所は曲の由来にかかわらず、場面に適合した音楽を大胆に取り入れたことである。映画を主体として考えればこれでいいわけである。この映画のサウンド・トラックのレコードが出回り、私の家にもあって姉たちが毎日聞いていた。確かコロンビアの小盤、何インチ盤というのかももう忘れた。

この映画のいま書いた特質について論じたのは評論家で研究家の堀成行さんという人だった。この会とも親しかった。「音楽の世界」に「日本ピアノ文化史」という長大な連載を載せた。大変な研究調査の結実である。ある時、岩波新書がこの著作を買いたいと会の事務所に電話してきた。私が電話を受けた。堀さんに伝えたところ、面倒臭いからことわってくれとのことだった。岩波新書をことわるのだから変わった人である。西郷隆盛ではないが、カネも要らなきゃ名も要らぬ、という人だったか。(助川敏弥)

啓蟄や「蟻の一穴」土俵を崩す

—八百長相撲が気になって—

相撲の「八百長疑惑」が気になって、特集をする週刊誌を10日間で9冊買った。いつもは手にすることもない女性誌も含めて。

相撲が好きだ。幼いころは相撲取りになりたかった。思うように身体が基準に達せそうもなく、早々にあきらめたのだけれど。

地域のお祭りで、「子ども相撲大会」があると、勇んで出かける。わが家を基点に1キロメートル圏内であれば、どこにでも。ことごとく優勝して凱旋。

戦後の復興期、バケツや醤油、西瓜などなど賞品は日用品がほとんど。親孝行をしたものだと思う。小学4年から中学1年ぐらいまでだったか。双葉山をものぐ連勝記録更新の中、思わぬケチをつけられた。顔をおぼえられて、他地域からの出場を禁止されてしまったのだった。賞品のひとりじめに文句が出たのであろう。



国技館が蔵前にあったころ、初めて相撲を見た。そびえ立つ大男が、目の前でガツン、ガツンとぶつかり合う取りくみの

迫力にすっかり気圧されて、相撲取りへの夢は、あっさりとつぶされてしまった。朝汐太郎が横綱になる前、栃錦と若乃花の両横綱がしのぎをけずっていたころのことである。それから相撲への思いは、テレビ観戦でということに。

プロレスには筋書きがあるが、相撲は真剣勝負！と信じて疑わなかった。子どもの時に見た、激しいぶつかり合いの音が耳に残っているからだ。

そんなこともあって、週刊誌の告発記事に対する日本相撲協会の名誉毀損裁判での、最高裁判所の判決にはホッとしたのだった。八百長はなかったんだ、真剣勝負が証明されて週刊誌側は、4,785万円もの賠償金を支払わされたのだから、と。

ところが、覚醒剤所持や暴力沙汰、野球賭博と、次々に出てくるこのところの相撲界の乱れに、これはどうも？・・・とさすがに世間も疑い始めたところに、八百長相撲の実態が明らかにされたのだ。それ見たことかとばかりに。

最高裁のお墨つきはどうしたの？というところである。週刊誌側は、「訴訟詐欺」で訴訟の準備に入ったようだ。最高裁も思わぬ黒星をつけられたものである。

1場所は15戦。8勝すればその地位は安泰。ならば、無理せずケガせず長持ちで、ということになるらしい。そこに相互扶助の思いが入るのだろう。負ければ転落という角番で救われる力士の多くが、コンチワ相撲（八百長）だと言う。

あろうことか、それは星の貸し借りとして、昇進や優勝のかかった場面でもなされていたというのだ。週刊誌の記事をなぞることになるが、2006年九州場所における、

横綱朝青龍の全勝優勝でのガチンコ勝負は、4番だけだったというのには驚いた。あとの11番は八百長の白星なのだ。すっかり真剣勝負だと信じていたのに。

ちなみにガチンコという言葉、一部の辞書にも載っている。「真剣勝負」という相撲の業界用語として。すべて真剣勝負であれば、こんな言葉が使われるはずはない。八百長の歴史は相当古くて長そうである。

鬼籍に入った、土俵の鬼の若乃花、そして栃錦、朝汐の横綱達にも八百長疑惑があったのだと、52年前の週刊現代（創刊号）が告発していたことを今回知った。わたしはそのころ中学1年生。何の疑いもなく相撲に夢中になり、朝汐を応援していた。そしてこの場所、朝汐は大関から横綱に昇進したのだ。その裏で若乃花と栃錦のコンチワ相撲があったというのである。

「イタミニ耐エテ、ヨクガンバッタ、カンドウシタ！」と土俵上で貴乃花の優勝をたたえた総理大臣。日本中が固唾を呑んで見守った貴乃花と、武蔵丸の決勝戦の一番。手負いの貴乃花に対して武蔵丸が抱いた惻隠の情が、八百長ではないものの、ひるみになって、武蔵丸が勝ちを譲ったのでは、と噂になった。ガチンコであっても疑われてしまう風潮が、相撲界にはあるということなのだろう。そのことが残念ではないか。

戸隠というと、信州の北部、戸隠山の麓の地域である。ソバが旨い。名産地である。

【筆者紹介】 狭間 壮（はざま たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。



この戸を隠すの地名は、天手力男命（あまのたちからおのみこと）が投げた天の岩戸が飛んできた所、との伝説が残る地だ。

「日本書紀」に語られるところの、天照大神（あまてらすおおみかみ）が隠れた天の岩屋。その戸をこじあけたのが、天手力男命だ。こじあけたその岩戸を投げ飛ばし、それが飛んで飛んで信州の戸隠へということなのだ。

その天手力男命に扮したのが、横綱朝汐。映画「日本誕生」（1959年・東宝）に登場して、その強力無双ぶりを発揮したのだった。天の岩屋から顔をのぞかせた天照大神を、原節子が演じていた。内容などこまかくは記憶にないが、相撲大好きの中学生のわたしにとって、あこがれの英雄は朝汐であった。だからこそ思うのだ、朝汐は八百長なんかしてないはずだと。いささかの感傷をこめて。

保育園でコンサートがある。「金太郎」と「おすもうくまちゃん」を歌ってみよう。そして聞いてみようか。「お相撲好きですか」「お相撲さんになりたい子いますか」と。それにしても、この2つの歌、知っているだろうか。八百長疑惑が気になって、週刊誌を読み漁った10日間。熊ならぬ猫と一緒に冬ごもり。気がつけば外はすっかり「光の春」に。



連載 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第17回〕 クライスラーの嘘

「嘘をついたこと、ありますか？」と聞かれたら、どうだろう。大抵の人は一瞬ドキッとして戸惑い、はっきりと「いいえ」という人は少ないのではなかろうか。なぜなら、ひと口に嘘といっても大小があり、小さなものなら誰にも身に覚えがあるからである。

昔風の教育だと、「嘘は泥棒の始まり」とか「嘘をつくと、閻魔さまに舌を抜かれる」と厳しく脅かされたから、多分誰もが有罪・地獄に落ちることになるが、しかしまた「嘘も方便」という言葉もある。それによって悲しんでいる人を慰めたり、悩んでいる人を勇気づける、あるいは人間関係をスムーズにすることもあるから、要は質と程度の問題。嘘は生きていくために必要な、人間関係の潤滑油といえるかもしれない。

音楽家の中にも、嘘をついてうまくやった人・失敗した人はたくさんいたと思われるけれど、話題になった嘘といえはすぐに思い出されるのは、名ヴァイオリニストにして作曲家であったフリッツ・クライスラー（1875～1962、オーストリア→アメリカ）のそれである。

どんな嘘かという、自らステージで演奏するために作曲したヴァイオリンの小品（例外として協奏曲もある）に、自分の名前ではなく、ルネッサンスやバロック時代の

埋もれた作曲家たちの名前をつけた、というものである。つまりそれらの人々の作品ということで、自分は単なる発見者。いい曲なので、ちょっと手を加えてご紹介しましょう、という嘘なのである。そういう宣伝をしながら、なんと40年間（18歳頃から60歳の誕生日まで）位、澄ました顔で演奏していたのである。



フリッツ・クライスラー（1875～1962）

クライスラーがどんな人か知らない人のために、ちょっとご紹介しておく、彼はウィーンの生まれ。シューベルトやヨハン・シュトラウスと同じ生粋のウィーン子というわけである。4歳になるかならない頃、アルファベットより先に楽譜の読み方を覚え、葉巻タバコの箱に靴紐を張って手製の楽器をつくり、ヴァイオリンに見立てて弾くマネをした。それを見てびっくりし

た両親が本物のヴァイオリンを買い与えると、たちまちに上達（医者だった父親が手ほどき）し、7歳にしてウィーン音楽院へ入学を許され（通常は10歳）、10歳で首席卒業。今度はパリ音楽院へ入学するが、ここも12歳で卒業してしまう。早いだけでなく、こちらでは20歳以上の競争者40人を相手に、金賞をとるという前代未聞の快挙をなし遂げる。まさに神童である。ピエルネが8歳、ドビュッシーが10歳で入学したことを考えると、その才能がどれほどずば抜けていたかわかろうというものである。実際、現在定番となっているベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲ニ長調」のクライスラーによるカデンツァは、彼12歳の時の作曲だということから驚きである。

ヴァイオリニストとしてのデビューは、13歳の時から。一時は中断して医学・美術を学び軍人にもなったが、24歳頃から本格的に活動。完璧なテクニックと甘い音色により、いわゆる“ウィーン風”の優美な演奏で世界中のファンを魅了した。

作曲では、主として愛らしい小品—「愛の喜び」「愛の悲しみ」「ウィーン奇想曲」ほか—で親しまれるが、それらの中にプニャーニ、ルイ・クープラン、ポルポラ、フランクール、マルティーニ、ボッケリーニ

の名が入った曲がある。じつはそれが名前を借りて作曲した曲なのである。そのことがバレたのは1935年2月2日。60歳の誕生日のことであった。名ヴァイオリニスト、メニューインがお祝いのつもりで彼の曲を取りあげ、解説をオリン・ダウンズという批評家に頼んだところ、彼が追求して「じつは、すべて私の作曲だ」と告白させたのである。

なぜ、そんな嘘をついたのかというと、「大曲はカネがかかり、ピアノ伴奏では笑われる。その他はレパートリーに限られていたから、書いたのだ。しかし自作だといえば、若僧のくせに生意気だ！といわれるのがオチ。だから埋もれた作曲家の名を借りたのだ」とのこと。しかし時には一部の曲に自分の名を入れ、批評家たちに「大半の曲はよかったが、クライスラーの曲だけは落ちる」などといわせていたから、真相が明らかになると音楽界は大騒ぎ！「よくぞ批評家を欺した」「永年欺してひどい奴」の賛否両論が入り乱れたが、結局それらの曲には「～の様式による」の前置をつけることで決着がついた。例えば「ポルポラの様式によるメヌエット」といった曲。CDやカタログを覗くと、結構多いことに気がつくだろう。

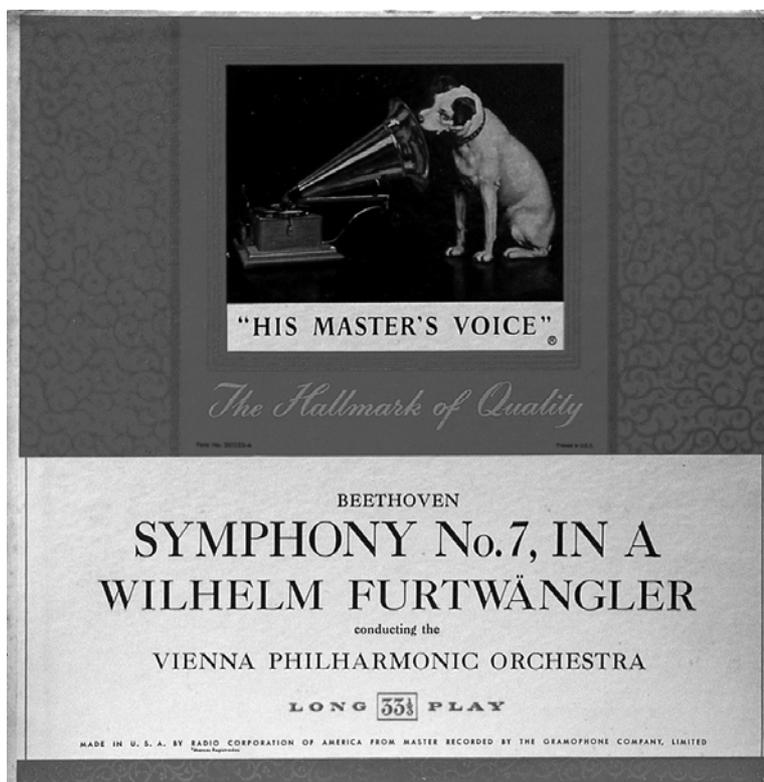
.....
【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



第22回

フルトヴェングラーのベートーヴェン交響曲第7番

1月19日にEMIが発売した「フルトヴェングラーSACD名盤シリーズ」10タイトルが話題を呼んでいる。サウンドスキャンの「週間アルバム Classic チャート 200」（1月17日～1月23日）の13位までになんと全10作品が入ったのである。今更ながら日本でのフルトヴェングラー人気の高さに驚かされるばかりだが、今回のSACD（CDプレーヤーでも再生可能）作成のため、イギリスEMIのアビー・ロード・スタジオで新たなリマスターが行われたこともファンの期待を高める要因となっていた。



中でも注目のは1950年1月18日録音のベートーヴェン／交響曲第7番だろう。1954年録音の《運命》や1952年録音の《英雄》がモノラル時代の優秀録音だったのに対し、第7はLP時代に聴いた印象でも録音状態が落ち、かつ終楽章の3分30秒前後にハムと思われる女性の声が混入するなど、せっかくの名演をスポイルしていたからである。「これまで未使用の、1950年1月にウィーンのオリジナル・セッションで録音されたテープが見つかりました」（解説書より）とのことで、音質向上が大いに期待されたのである。

この第7、始めは1951年9月にイギリスでSP盤（DB9516～20）として発売され、1952年にアメリカでLP（LHMV1008）が発売された。そのため、元はSP録音（女声の混入なし）で、それをLP用に編集したときに女声が入った、というのがファンの間での通説だった。

果たして新しい SACD の音質は、1950 年録音とは信じられないくらい鮮明なものとなった。初めからこの音質でこの名盤を聴ける新しいファンが羨ましいくらいである。ところが、終楽章の女声混入は認められる。これをどう解釈したら良いか…。ここからは私の推論だが、1950 年のセッション時に SP 録音とテープ録音を同時に回していたのではないだろうか。そしてテープ録音の方にハムが入ってしまったのではないか。いずれにせよ、ファンにはまた一つミステリーが増えてしまった。



- ベートーヴェン：交響曲第 7 番イ長調 (写真 前ページ左)
 ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮
 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
 [米 RCA LHMV1008 (LP)]

1952 年発売。日本盤が 1957 年に発売されるまで、この名演を聴くには当盤を求めなければならなかったが、銀座の輸入盤店での価格は 5000 円だったという。同じ年に若原一郎の「僕の月給一万円」という歌が流行った時代の高嶺の花だった。

- 同上 (写真 このページ右上)
 [EMI TOGE11003 (SACD)]

2011 年 1 月 19 日発売。1954 年録音の交響曲第 5 番《運命》がカップリングされて 3300 円。最近の CD の安さからすると高い印象だが、LP 時代の価格の高さや、演奏と録音の内容からすれば安いとも言えそう。

【板倉重雄氏プロフィール】 1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」(アルファベータ)を上梓。



ピアノ 佐藤ローデン千恵



もう何年前になるだろうか。今はバーズ&ノーブルのような大きな本屋さんの一部で売っているCDを専門で売っていたお店が、ニューヨークにあったところの話である。ダウントウンのタワー・レコード店でぶらぶらしているとき、アラン・マンデルというピアニストのCDを見つけた。

「アメリカン・ピアノ」というタイトルで映画音楽のピアノ版が録音されていた。1曲目がアレックス・ノースが作曲した「欲望という名の電車」だった。この曲はもともとテネシー・ウィリアムズのシナリオをもとに、1951年にヴィヴィアン・リーとマーロン・ブロンド主演、エリア・カザン監督で作られた映画のために作曲されたものである。この映画は前に観て気になっていたし、大好きだったが、この音楽にも魅せられてしまった。

テネシー・ウィリアムズの台本を読み直してみた。映画ではマーロン・ブロンドの演技が目立ってしまうが、女主人公ブランチへの理解と同感が深まり、ブロンドが演じるスタンレーよりもストーリーのなかで重要な要素を占めているのに気がついた。20世紀前半のアメリカの女性は社会に受け入れられたいという思いが彼らの行動を規制していた。ブランチも例外になく他人の評価が (proper decorum) が彼女の正気を支えている。噂によって彼女の正体があきらかになるにつれて、ファンタジーのなかで描かれた“私”が維持できなくなる。社会に期待されている自己と欲望とのかねあい。その葛藤のなかで、あきらめのなかで、彼女自身の純粋さがきらめきを増す。狂気のなかへ沈んでいくブランチの言葉、“私はいつも知らない人のやさしさに救われているの I have always depended on the kindness of strangers”に代表されるように、女の性と弱さと強さが同時に描かれている。

探してもなかなか見つからなかった楽譜について、ついにアラン・マンデル氏に問い合わせた。もう出版されてなく、ワシントンDCのLibrary of Congressに楽譜があるということである。マンデル氏はコピーでよかったらと、親切にも送ってくださった。ピアノ版はNine Piano Sequenceという副題で、アレックス・ノース自身が1953年にアレンジしたものである。ひとつひとつの曲は個性的な音色とリズムを持っていた。しかし、映画の背景のオーケストレーションのようにカラフルな音をピアノだけで出す自信はなく、私は演奏を控えていた。

そしてそのまま10年近くたった。コンサートで十河陽一のチェロとピアノの「浄炎」を演奏することになり、友達のパアニストの紹介で、ジョディ・レッデジに出

会った。はじめてのリハーサルで驚いた。彼女のチェロと私のピアノはぴったりで、お互いに顔を見合すほどだった。彼女が作曲家でシンガーであるだけでなく、ジャズ・バンド Fire in July のリーダーをしていることを知った。長年こころの中で温めていた私の望みを彼女に話した。彼女に映画を見てもらい、テネシー・ウィリアムズを読んでもらった。彼女は理解も深く、共同プロジェクトが始まった。

ジャズは聴くだけで、何の知識も経験もない私と、クラシック出身でポップ系のジョディ・レデッジ、ジャズバンドから何が生まれてくるだろうと興味と期待があった。そして2年後、ジョディはノースによるピアノ9曲にオリジナル6曲（4曲はジョディ、2曲はトロンボーンおよび作曲家であるアラン・ファーバーによる）をはじめ、バンド・メンバーのインプロヴィゼーションを含むオーケストレーションや曲から曲とのトランジションを加えて、1時間程度の作品は仕上がった。

CD制作の過程はほんとうに手作りだった。トニー・ベネットの息子さんの経営するニュージャージーのベネット・スタジオでデイ・ベネットに録音してもらった。夏のはじめの青い空が広がっていた。秋にはブルックリンでエディットを最後にマスターをと、たくさんの方にお世話になった。そして先週、2月5日の夜マンハッタンのヴィレッジ地区にある天理カルチュラル・インスティテュートで、CDのお披露目コンサートを開いた。演奏と同時に、映画のシーンをスライド風に流した。ジョディのピュアな透き通った声、トロンボーンのうねり、クラリネットのセクシーな旋律、夢のようなヴィブラフォンの音、パーカッションの時の刻み。いろいろな種類のおいしい食べ物を楽しんでいるようだった。聴衆のかたがたにはとても楽しんでいただけた。

音楽の将来は、ジャンルを取り外すことから始まるような気がする。といってもただ籐をはずしても仕方がない。新しい事象に反応するにはまず、音楽の本質を見抜け自分のバックボーンを築かなければならない。歴史を知って経験をつまなければならない。バックボーンさえあれば、ほかのジャンルのひとが創る音楽や、専門家でない人がつぶやいた批評が聴けるようになって、耳に栓をして拒否しなくなる。音楽の本質は共感、分かち合うことにあると思う。今回、ジャズの人たちと音楽を創っていて本当に楽しかった。ジャズ・ミュージシャンはとてもデモクラティックという意味が経験できた。彼らはお互いに励ましあって、決してほかのミュージシャンを正面からけなさない。練習をはじめたころ、アラン・ファーバーの曲「パリ」でアフター・ビートを続けるピアノのパートが弾けなかった。どうしてもびっこになってしまう。演奏の足をひっぱるのではと恐れてライブのときは遠慮をしてきた。それが、先週のコンサートでは無事に弾くことができたのである。仲間に助けられて・・・

(さとう ローデン ちえ 本会 ピアノ会員：米国在住)

東京では毎晩のように数多くの演奏会が行われ、様々に新しい創作が展開されている。これらの情報はインターネットで探ればそれこそ膨大に知ることが出来るが、多くは断片的であり、玉石混交の素材程度。殆どが個人の日記ブログや掲示板等であり、十年前の情報となれば探すのも一苦勞である。雑誌や新聞のように国会図書館に行けば読めるということもない。その雑誌や新聞でさえ、読み易さを名目に文字数を減らし、情報が削られていく。ネットに情報が載ることなく終わっていく事もある。この状態が長年続けば歴史の喪失にも繋がり兼ねないと危機感を抱くのは大袈裟だろうか…。筆者が鑑賞した会が記事にならずにいることも少なくないゆえ、本誌副編集長からの依頼を好機として、毎月見聞記を綴ろう。

2011年の演奏会初めは4日、ローラン・テシュネ主催のアンサンブル室町。バロック楽器と和楽器に和洋の踊りも加えて新作と編曲で活動する歌舞音曲集団である。ポール・クローデルの詩集『百扇帖』をテーマに2009年武満賞1位の酒井健治ら日仏作曲家の新作を披露。この楽団の特色は毎回最後の編曲。和洋楽器・踊りだけでなく東西の過去現在未来を交錯させ儀式的大団円となる。7日はvn奏者印田千裕リサイタル。滝廉太郎の師である幸田延のソナタ第2番(1897!)、寺内園生のパッション、パデレフスキのソナタと女性作曲家を特集。尾崎宗吉の奏鳴曲第2番の校訂版披露も意義ある仕事。14日は東フィル100周年委嘱・望月京のむすび初演。指揮の大野和士が頸椎故障で渡邊一正が急遽代演。18, 24日は別宮貞雄プロデュース都響。権代敦彦のpf協奏曲ゼロ、西村朗sax協奏曲、幻影とマントラ再演、田中カレンのvc協奏曲アーバン・プレイヤー日本初演など。24日は西村とジョリヴェを2曲づつ取り上げジョリヴェのピアノ協奏曲久々の再演もあり、文化会館が満員、別宮の深い知識に裏打ちされた企画6年継続の最後に相応しい熱気ある会。来年からは一柳慧企画となる。21日は現音のフュージョンフェスタ。河内琢夫ディジリドゥとvcのソナタや門脇治ウクレレと竹箒のウクレレのおじさん初演等。22日は読響の第500回定期。池辺晋一郎の多年生のプレリユードが委嘱初演。祝典の華やかさと歴史の回想と継続を巧みに描く。下野竜也の指揮も味方に管弦楽の運動性を引き出した。26日は和楽器による新作を主とする日本音楽集団とAura-Jの定期が重なった。筆者は三木稔傘寿のAura-Jを聴く。三木にある根源への志向を強く再確認した。若手金井勇の新曲はセンシティブなサウンド。21, 27, 28日はJFC日本の作曲家。若手特集、楽譜出版曲特集、大谷康子プロデュース。29日は和楽器合奏曲を募集した第4回牧野由多可作曲コンクール本選。尺八も吹く米国人エリザベス・ブラウンが和楽器らしさを引き出して(日本人よりも!?)1位。尚、筆者が1月に聴いた演奏会は16回。

(にし・こういち 本会 賛助会員)

突然、ニュージーランド南島クライストチャーチ市が地震に襲われ、語学研修へ行っていた多数の方々が行方不明になっているというニュースが入って来た。将来への夢を膨らませて行かれたことと思うが、まことにお気の毒なことである。無事でいてくれることを祈りたい。

地震は地下に蓄えられた歪みが岩盤の耐力の限界に達したとき、その歪みを一挙に解消しようとする力が働き、起こるものらしい。

ところで、30年、40年と長期独裁政治が続いた中東諸国が、ご存知のように、ここに来て大きく揺れ動いている。チュニジアで始動した波は、エジプトを飲み込み、現時点ではリビア、バーレーンを飲み込もうとしている。そして、この波にはさらに大きく広がりそうな勢いがある。

時間は刻々と平に経過して行くが、歴史的な大変動というものは、地震と似て、一気に起こる事が多いようだ。私はいま、1989年秋に起こった東欧の一連の大政変を思い起こしている。当時、私はヨーロッパに滞在していた。まず、10月にハンガリーの国家体制が社会主義から共和制に変わった。翌月の11月10日にはベルリンの壁が崩壊し、同じ月にチェコスロバキアの共産党政権が崩壊する。そしてクリスマスが近づいた12月22日にはルーマニア革命により、チャウシェスク政権が崩壊する。

テレビで、これらのニュースは連日のように流され、民衆がベルリンの壁を壊している映像や、逃亡したものの二日後に逮捕され、両脇から銃を突きつけられ、壁に両手をつき後ろ向きにされて何かぶつぶつ喋っている独裁者チャウシェスクの惨めな姿が生々しく放映された。ベルリンの壁が崩壊したとき、普段は冷静な先輩作曲家のS氏が、「ベルリンの壁が壊された。これでドイツは一つになる」と興奮して電話して来た。

ルーマニアのチャウシェスク政権が崩壊する少し前の12月初旬、私は用があってウィーンを訪れたが、暇な時間をみてシェーンブルン宮殿を見学した際、大挙して訪れたチェコスロバキアの観光客とかち合った。大勢の観光客の表情から、政変後の開放感といったものを感じた。また、翌年にはベルリンを訪れ、崩壊したベルリンの壁を目のあたりにした。

やはり、大政変が起こっている最中にその間近にいと、そこでしか体験できない空気のようなものが伝わって来て、こちらにも興奮してしまう。

中東諸国は地理的には遠い国ではある。しかし、インターネットなど情報網が発達した今日、物理的距離の遠さはそれほど問題にはならない。しかし、中東の国々が東アジアやヨーロッパの諸国に比べ遠く感じられるのは、私にとって、あまりにも判らないことが多すぎるからであろう。

中東というと、アメリカの支援を受けたパーレビ国王独裁政権が崩壊した 1979 年のイラン革命を思い出す。この時は、ホメイニー師を精神的支柱とし、反米、イスラム教化を前面に押しだした革命となった。アメリカは革命後のイランを牽制するため、イラクのフセイン軍事政権に強く肩入れし、その後、泥沼にはまって行く。

今回の一連の革命においても、イスラム原理派などの台頭を懸念する見方が、西欧諸国の一部にあるようだ。中東革命の広がりも、89 年の東欧革命の連鎖と同様、それまで抑圧されて来た民の反発力が原動力となっていることは間違いなかろうが、個々の国によって事情は異なり、反米、反西洋化、イスラム原理主義化が共通の目的となるとは考えにくい。私の乏しい洞察力では、個々の国の革命後の姿など到底予測出来ないが、独裁政権打倒に立ち上がった民衆の勇気に対して高い敬意を払いたい。

ところで、もう一度 1989 年に話を戻そう。この年の夏、ISCM (国際現代音楽協会) の音楽祭がオランダのアムステルダムで開催された。当時、私はオランダに住んでいたのもので、その音楽祭に出席した。総会で中国の加盟を認めるかどうか審議されたが、当時まだイギリスの管轄下にあった香港の代表が大反対した。香港の作曲家の言い分だと、中国は社会主義国家で芸術は国家の統制下にあり、芸術音楽分野における創作レベルは非常に低く、到底加盟を認める事など出来ない、というのだ。総会やコンサートの後、外国の作曲家と食事をしたり、語らったりしたが、その中に譚盾 (タン・ドゥン) という名の感じのよい東洋の青年作曲家がいた。中国人ということだったが、同じ東洋人のよしみで、よく席をともにした。

ところがオーケストラ作品のコンサートの日、新しく印刷されたプログラムに譚盾作曲の「オン・タオイズム」が加えられ、作曲者自身が指揮と歌唱部を担当して演奏した。この作品については、CD などでお聴きになった方もいらっしゃると思う。私は昔の記憶なので鮮明には覚えていないが、多用されるグリッサンド奏法、裏声で甲高く歌われる歌唱部などを通して表現されている音楽は、中国の大地の香りが漂うようなシャーマニックで美しい作品だった。そして、この作品を聴いた作曲家、音楽学者、評論家の殆どが、香港の作曲家が主張していた「中国本国の芸術音楽分野における創作レベルは非常に低い」という評価は、まったく根拠がないと認識し

たことは間違いない。この作品が演奏された後、譚盾は多くの作曲家（特に欧米の）や批評家に取り囲まれるようになり、ISCM 音楽祭期間中は、なかなか話しが出来ないほどだった。

その後、中国は芸術・文化面のみならず、スポーツや経済面でも急速に国際社会に進出して行き、いまや経済面でも米国に次ぐ大国となった。改革開放政策が功を奏し、都市住民は急速に経済的に豊かになって来ているようだが、その反面、地域格差、持てる者と持てない者との間の経済格差が広がっていると云う。あるいは、いま中東諸国を飲み込んでいる改革の波が中国にも達し、中国もなんらかの変革を迫られるのかもしれない。

人は歴史を作り、また歴史は人を育む、音楽など芸術も、その波の圏外に存在することは出来ないであろう。私は歴史を作るとまでは言えなくとも、ただ、歴史に流されるだけの人間にはなりたくない。私は、22年前に自由を求めて立ち上がった東欧の民、そして今年立ち上がった中東の民に改めて拍手を送りたい。改革が一時的に成功したようにみえても、また新たな問題が立ちはだかるかもしれない。解放後の東欧諸国がそうだったように。それでも、自ら歴史を切り開こうとした人々の努力と勇気は、讃えられるに値するものと思う。

(中島洋一)

『音楽の世界』 2月号の訂正

20ページ下から4行目 印象派の画家が外に出て風景を描くとするのに対し
印象派の画家が外に出て風景を描こうとするのに対し

20ページ下から4行目 音楽家の故野村光一氏 → 音楽評論家の故野村光一氏

読者の皆様へ

『音楽の世界』の記事に対する感想、ご意見、コンサートの感想、ご自分の近況報告など、なんでも結構ですから気楽にご投稿下さい。なお、原稿の文字数につきましては、最大で1000文字とさせていただきます。それ以内の文字数でしたら、どんなに短いものでも構いません。

なお、寄稿者については原則として氏名のみ公開する方針ですが、匿名を希望される場合は、その旨、お申し出下さい。住所、電話番号の公開についても、投稿者ご本人がそれをお望みの場合に限って、対応する予定です。投稿は、出来るだけ電子メールでお願いします。電子メールの宛先は以下の二つです。出来れば両方のアドレスに同時に送っていただきたいと思ひます。

編集長（中島洋一）：yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

日本音楽舞踊会議事務局：onbukai@mua.biglobe.ne.jp

編集長：中島 洋一



CMDJ 会と会員の情報

1. 平成23(2011)年度 役員・役職

平成23年2月11日に、としま産業プラザに於いて平成23年度(第49期)定期総会が開催され、選出された理事によって、同2月15日(火)臨時理事会を日本音楽舞踊会議にて開催。本年度の役員役職が以下のように決定致しました。この方々によって本年度の本会運営が行われる事に成りましたので報告致します。

役員

理事：浦 富美(留任)・北川暁子(留任)・北川靖子(留任)・橘川 琢(留任)
栗栖麻衣子(留任)・助川敏弥(留任)・高島和義(留任)・高橋 通(新任)
高橋雅光(留任)・戸引小夜子(留任)・中島洋一(留任)・並木桂子(留任)
広瀬美紀子(新任)・深沢 亮子(留任)・北條直彦(留任)

監事：新井知子(留任) ・ 西山淑子(新任)

役職

○代表権を持つ役職

代表理事：助川 敏弥(留任)
深沢 亮子(留任)

理事長：戸引小夜子(留任)

副理事長：北川 暁子(留任)

○業務 役職

【管理部門】

[事務局] 事務局長 高島和義
事務局次長 浦 富美・栗栖麻衣子
事務局相談役 新井知子・戸引小夜子・橘川 琢 (全員・執務兼任)

[財務局] 財務局長 橘川 琢
財務局次長 高島和義

【事業部門】

[出版局] 出版局長 高橋雅光

《機関誌出版部・機関誌編集部》

機関誌出版部長 橘川 琢

機関誌編集長 中島洋一

(機関誌編集スタッフ：新井知子・浦富美・大久保靖子・橘川琢・栗栖麻衣子・
高島和義・高橋通・高橋雅光・戸引小夜子・北條直彦)

《電子出版局》電子出版部長 中島洋一 (ホームページ・メールマガジン編集長兼任)

[公演局] 公演局長 北條直彦

《公演企画部》公演企画部長 中島洋一

《部会人事》

〈作曲部会〉 役員未定

〈ピアノ部会〉 部会長： 並木桂子

副部会長：戸引 小夜子、栗栖 麻衣子 会計：田中俊子

企画相談役：深沢 亮子、北川 暁子

〈声楽部会〉 部会長： 浦 富美

副部会長：佐藤 光政 会計： 内田 暁子

〈弦楽部会〉 部会長： 安田謙一郎

2. 訃報

本会の最古参会員のお一人でもあられた、矢澤見どり特別会員が平成 23 年 2 月 3 日午後 3 時 30 分、新宿区にあります国際医療センターで心不全と脳梗塞のため 84 歳で亡くなりました。

矢澤見どりさんは、故・矢澤寛事務局長夫人、シャンソン歌手として永年に亘り本会のためにご尽力下さいましたことを心より感謝し、ご冥福をお祈りし報告と致します。

3. 会と会員のスケジュール

3 月

- 1 日(火) 原口摩純「ショパン 201 歳のお誕生日」「コンサート&レクチャー」
出演：原口摩純【東洋英和女学院大学生涯学習センター】
- 5 日(土) 原口摩純ピアノ・サロン・コンサート「名曲の輝き」
【名古屋フィオーレ (中村公園徒歩 1 分) 14:00】
- 5 日(土) 浦 富美・並木桂子・島筒英夫「春のふれあいコンサート～やさしさにゆれて～」曲目: さよなら ぼくたちのほいくえん(ようちえん)(島筒英夫曲) 亜麻色の髪の乙女(ドビュッシー)【さいたま市立北浦和公民館 14:00 入場無料(要整理券)】お問合せ 浦:04-7184-4572
- 7 日(月) 定例理事会【事務所 19:00】
- 12 日(土) 原口摩純ピアノ・サロンコンサート「名曲の輝き」
【ヤマハ銀座店(東京) 14:00】¥3,500/学生¥2,500
- 12 日(土) 廣瀬史佳 クラシック名曲面白再発見 音楽評論家 真嶋雄大
モーツァルト:トルコ行進曲 ベートーヴェン:月光 ほか
【朝日カルチャーセンター(新宿住友ビル 7F) 13:00~14:30】
- 22 日(火) 深沢亮子ーモーツァルトとベートーヴェン 共演:永井公美子(Vn)
【新宿住友ビル 7 F 朝日カルチャーセンター 13:00】
- 23 日(水) ピアッティコンサートー春の音絵巻 曲目:ラヴェル/スペイン狂詩曲、戦没学生の手記(朗読/音楽)他 出演:栗栖麻衣子(Pf)ほか【桶川響きの森 18:30】
- 25 日(金) 『音楽の世界』編集会議 19:00~ 会事務所
- 27 日(日) エフゲニー・ザラフィアンツリサイタル&公開レッスン

曲目:シューマン/フモレスケ、ショパン/幻想ポロネーズ他【仙川アヴェニューホール リサイタル13:00 5000円、公開レッスン15:30~18:30 聴講2000円 コンサートセット券1000円】連絡先:齊藤寿美代 042-366-6452

29日(火) 深沢亮子 N響、読響の首席奏者との室内楽の夕べ

曲目:シューベルト/ますほか 共演:中村静香(Vn)、店村真積(Va)、毛利伯郎(Vc)ほか【目黒久米美術館 18:00】

29日(火) 原口摩純ーやまのて音楽祭オープニングコンサート 演奏:原口摩純ほか
ラプソディ・イン・ブルー/ガーシュイン【名古屋市千種文化小劇場 午後】

4 月

7日(月) 定例理事会【事務所 19:00】

8日(金) フレッシュコンサート CMDJ 2011【すみだトリフォニー小ホール 18:30】

10日(月) 親子で楽しむピアノデュオの世界 pf 並木桂子 共演・岸洋子

リスト/ハンガリー狂詩曲第二番ほか【ユーロピアノショールーム 15:00 無料】

16日(土) 深沢亮子 シューベルト作品 共演:中村静香

【新宿住友ビル7F朝日カルチャーセンター 16:00】

29日(金.祝) 浦 富美・島筒英夫・渡辺裕子 あびこファミリーコンサート 21th

「新緑によせて~歌とピアノとヴァイオリンの調べ~」 曲目:さよなら
ぼくたちのほいくえん(ようちえん)、新緑の中で(島筒英夫作曲)

【あびこ市民プラザ 13:30 1000円】

29日(金.祝) エフゲニー・ザラフィアンツ リサイタル

曲目:シューマン/フモレスケ、ラフマニノフ/ソナタ第2番ほか
【神戸朝日ホール 13:30 5000円】

5 月

7日(月) 定例理事会【事務所 19:00】

8日(日) 深沢亮子ー仙台ピアノ工房5周年記念 深沢亮子ピアノコンサート

【仙台ピアノ工房 15:00】

11日(水) 作曲部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)

14日(土) 亀井奈緒美、栗栖麻衣子 デュオコンサート

インファンテ/アンダルシア舞曲ほか【カワイ表参道ミュージックサロン
「パウゼ」 19:00 一般3000円/高校生以下2000円】

20・21日(金・土) 広瀬美紀子「ピアノとチェロによるデュオコンサート」

曲目:助川敏弥/Prelude 春(初演)ほか 共演:管野真衣(Vc.)

【スタジオムジカ(八王子)】

21日(土) やまのて音楽祭:原口摩純 ガラ・コンサート「ピアノ&ゴスペル」

大人も子供も楽しめる音楽会 Part3【名古屋市千種文化小劇場 13:30
一般2500円/中高生1000円/1歳~小学生500円】

26・27日(木・金) 深沢亮子 CD収録 中村静香さんと シューベルト作品

28日(土) 並木桂子ーピアノデュオブリランテ第9回公演~フランスとロシア~

曲:チャイコフスキー/バレエ音楽・眠れる森の美女ほか

【オペラシティリサイタルホール 19:00 全自由席3,500円】

6 月

21日(火) ベートーヴェン ヴァイオリンソナタ レクチャー

Vn. ソナタ第7番 講師:北川暁子・北川靖子 ピアノ奏者:亀井奈緒美

【18:00～ 北川靖子宅 】お問い合わせ・お申し込みは戸引まで

7 月

- 5日(火) 声楽部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)
9日(土) サロンコンサート 並木桂子&田中俊子 ほか
ベートーヴェン/運命(四手連弾)ほか【原宿アコスタジオ 14:30 2500円】
15日(金) ピアノ部会コンサート【杉並公会堂小ホール】(詳細未定)
31日(日) 戸引小夜子 -「ソロと2台ピアノの夕べ」共演:安達朋博 曲目:リスト、
ドビュッシー、ミヨー ほか【大成コンサートスタジオ 17:00 軽食つき5000円】

9 月

- 15日(木) オペラコンサート 2011【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)

10月

- 4日(火) 20世紀以降の音楽とその潮流～様々な音の風景Ⅷ～
【すみだトリフォニー小ホール】

11月

- 10日(木) 深沢亮子 Duo リサイタル 中村静香さんと(Vn)【東京文化会館 19:00】
11日(金) 並木桂子-作曲家シリーズV ドヴォルジャーク
曲: ピアノトリオ「ドゥムキー」ほか【ティアラこうとう小ホール 19:00】
12日(土) CMDJ 若い翼によるコンサート4【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)

12月

- 6日(火) ピアノと室内楽の夕べ 日本音楽舞踊会議主催【音楽の友ホール 19:00】
深沢亮子(Pf.)、恵藤久美子(Vn.)、安田謙一郎(Vc.)、藤井洋子(Cl.)
10日(土) 麦の会チャリティーコンサート【津田ホール 14:30】

4. 新入会員ご紹介



中 嶋 恒 雄 (作曲・山梨大学名誉教授)

この度旧知の北條直彦さんに導かれて入会させて頂くことになりました。作曲、指導、音楽教育学、音楽財団設立運営、音楽会企画、雑誌編集などいろいろなことを半世紀以上もやってきて、現在ではたいして物事に希望を持たなくなりましたが、それでもまだまだやりたいことが残っていることを、有り難く思っております。この正月からは Bach のカンタータ no. 140 のコラールに自分流の歌詞をつけ、声楽曲に編曲して CD をつくりました。昔から小林秀雄ら文芸評論家が、生演奏と録音の差異による音楽の受容についてさまざまに語ってききましたが、今日ほど、生演奏とマイク、電氣的音楽の差が乖離した時代はないといえることができます。たとえば先日、テレビで N 響がマーラーの大地の歌を演奏しましたが、歌手の力演にもかかわらず、歌にオケがかぶさって、ほとんど歌が聞こえないことには閉口しました。この例では、歌い手にオケとは別のマイクを立てて、音量のバランスをとるだけで解決する訳ですから、大地の歌は録音音楽としてのみ存在するといつてもよいのだと思います。いずれにしろ、わたしにとって、録音音楽の在り方というもの、さいごのテーマとしてあるこの頃です。

編集後記

ようやく暖かい日が訪れるようになり、満開の梅の花が眺められる季節となりましたが、中東諸国の政変、我が国の政局の混迷など、内外とも大きなニュースで賑わっております。しかし、ニュージーランドのクライストチャーチ市が地震に襲われ、語学研修へ行っていた多数の方々が行方不明になっているというニュースにはびっくりしました。なんとかみなさんが無事でいて欲しいと祈っています。ところで、今月号の特集『卒業・音楽の世界を歩む人へ』は、音楽家の道を歩き始めた若い人達に向けたものです。特集のプロデューサーが記しているように、音楽家とは「職業」でもあり、同時に「生き方」でもあります。この特集の文から、勇気づけられる言葉や、音楽を続けて行くためのヒントを沢山探すことが出来ると思います。若い音楽家たちは、先輩諸氏の知恵を生かして、勇気をもって各々の道を歩んで欲しいと願っています。

(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉県	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集スタッフ：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

音楽の世界3月号(通巻527号)

2011年3月1日発行 定価500円(本体476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えます